

生活クラブ 放射能検査ニュース

No. 65 2017. 2. 13発行
生活クラブ連合会

1月は770検体の放射能検査を実施しました。

12月4回～1月4回(12/26～1/29)の放射能検査は770検体で、そのうち706検体(91.7%)は放射性セシウム不検出でした。検出は下表の14品目・64検体でした。検査結果の詳細は放射能検査結果Web検索をご覧ください。↓

1月(12/26～1/29)の検査数

単位:検体

	検査室	戸田	飯能	測定室	その他	合計
消費材検査	147	373	229	7	0	756
生産者原料	0	0	0	1	11	12
生産者製品	0	0	0	2	0	2
合計	147	373	229	10	11	770

福島第一原発事故以来の累計検査数

94,920

不検出の一覧
は、こちら→



1月(12/26～1/29)の総ての検出結果

複数回検出は最大値を記載(単位:ベクレル/kg)

消費材名(生産者)	所在地	検出回数	セシウム134		セシウム137		セシウム合計
			検出値	検出下限	検出値	検出下限	
生椎茸(JAちちぶ)	埼玉県	3	不検出	<5.5	26	<2.4	26
生椎茸(さがえ西村山農業協同組合)	山形県	13	不検出	<3.7	21	<2.3	21
生椎茸(中伊豆椎茸部会)	静岡県	5	不検出	<4.6	10	<4.5	10
生椎茸(JA甘楽富岡)	群馬県	5	不検出	<4.2	6.2	<2.3	6.2
生椎茸(丸エビ倶楽部)	茨城県	1	不検出	<4.0	5.5	<4.0	5.5
生椎茸(クボタ商行)	静岡県	2	不検出	<4.0	2.5	<1.9	2.5
菌床生椎茸(JA甘楽富岡)	群馬県	1	不検出	<4.2	8.8	<2.0	8.8
レンコン(栃木県開拓農)	栃木県	4	1.1	<1.0	7.6	<1.1	8.7
レンコン(JA新ひたち野)	茨城県	2	不検出	<3.3	8.7	<1.7	8.7
レンコン(農事組合法人マルツボ)	茨城県	17	不検出	<2.6	8.0	<1.3	8.0
丸干し芋(農事組合法人マルツボ)	茨城県	1	不検出	<2.9	6.6	<3.1	6.6
舞茸(JA甘楽富岡)	群馬県	5	不検出	<2.8	4.4	<1.4	4.4
舞茸(妙義ナバファーム)	群馬県	4	不検出	<2.7	2.7	<2.6	2.7
舞茸(JA上伊那)	長野県	1	不検出	<2.7	1.7	<1.3	1.7

(対象核種:放射性セシウム134と137の合計 単位:ベクレル/kg)

生活クラブの自主基準値

区分	検出下限目標	基準値	旧基準値
すくすくカタログ掲載食品(乳児用食品含)	1	不検出	10
飲料水	1	5	10
牛乳(原乳)			
米	2.5	10	20
鶏卵・鶏肉・豚肉・牛肉・乳製品			
青果物・魚介類・加工食品	6	25	50
生椎茸	10	50	100

国の基準値

食品区分	基準値
乳児用食品	50
飲料水	10
牛乳	50
一般食品	100

*生活クラブが目標とする「検出下限値」は、他団体とは異なり、セシウム134と137合計です。詳しくは生活クラブ連合会ホームページの放射能対策をご覧ください。



【3月のすくすくカタログ掲載食品一覧情報】不検出確認済みの食品だけを掲載します。

- 3月1回 黒米、こしあん、発芽はとむぎ茶、無洗米加美よつばまなむすめ
- 3月2回 チキンナゲット、レンコ鯛入り焼ちくわ、トマトケチャップ、大豆と野菜の煮豆つ子、あみえびふりかけ
- 3月3回 スライスベーコン、マヨネーズ、冷凍カラーピーマン(スライス)
- 3月4回 レモンラムネ菓子、たまごボーロ、黒糖ふがし、国産果汁のグミミックス
- 3月5回 プレーンヨーグルト、国産小麦と大豆のザクザククッキー、みかん缶3缶組

生椎茸とレンコンに見る原発事故の影響と対策

2011年の東京電力福島第一原発事故で、もっとも大きな被害を受けた食品のひとつが、生椎茸やレンコンです。放射能による影響、その後の対策などについて、まとめてご紹介します。

■原発事故後に生椎茸やレンコンから高い数値が出た理由

---きのこ類は元々、微量元素をたくさん吸収しやすいという性質を持った食材です。それが、滋養にあふれ栄養豊かな、きのこ類ならではのおいしさにつながっています。ところが、福島第一原発事故による放射能汚染が起きると、その性質が仇となってほだ木などに吸着した放射性セシウムを集めてしまうことになりました。程度は違いますがレンコンも似た性質を持っています。そのため、生椎茸やレンコンは、事故直後には放射能検査で高い値が出ることもあったのです。(※1)

■地元の山を守ってきた生椎茸栽培の営みも原発事故が破壊

生椎茸に関して言うと、放射能汚染は、生椎茸そのものだけではなく、椎茸を栽培するためのほだ木にも及びました。実は、原発事故前までは、福島県は日本国内のほだ木の一大産地として知られる県でした。国内の生椎茸を栽培するほだ木の3~4割は福島県産だったほどです。しかし、原発事故の放射能汚染によってそれらの木がことごとく使えなくなってしまい、事故後は、生椎茸のほだ木の供給がひっ迫するという状況も起こったのです。

生椎茸の栽培には、「地元の山を守る」という側面もあります。生椎茸の生産に使うほだ木は2~3年で交換することが多いのですが、ほだ木のための木を地元の山から定期的に刈ることで、森林が手入れされ、野山の環境が維持されていきます。また、生椎茸の栽培に使ったあとのスカスカになったほだ木は舞茸生産の培地に適しており、崩して舞茸の菌床栽培に利用するというサイクルもできていました。ところが原発事故は、そういった地元の人たちが長い年月をかけて築いてきた農業や林業の営みを、一気に壊してしまったのです。ほだ木を刈ることがなくなったために荒れてしまった野山や雑木林が、今、福島県にはたくさんあるのです。

■生活クラブ独自の基準で検査を徹底

生活クラブでは、「食べ物による内部被曝はできるかぎり少ないほうがよい」という考えのもと、原発事故の直後から放射能検査体制を作り上げ、まずは国の安全基準を超えたものを確実に出荷停止することを徹底しました。その中で、事故直後には、生椎茸やレンコンの供給中止の事例も生まれました。その後2012年に国の基準値とは別の生活クラブ独自の自主基準値を定め、2016年には自主基準値を大幅に引き下げました。生椎茸の新基準値は、国の基準(一般食品)の100Bq/kgの半分

である50Bq/kg、レンコンは青果物の区分で25Bq/kg。国の基準よりかなり厳しい自主基準で運用しています。

詳しくはWebサイトをご覧ください。

→

